

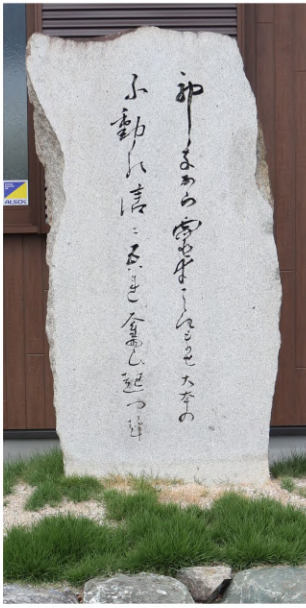
探索シリーズ② 尊師歌碑の説明

平成21年4月19日 月次祭講話
碧南分所 藤浦直

昭和49年5月19日 出口日出磨尊師様の歌碑が本苑に建立された。歌碑としては全国唯一のことである。ときあたかも尊師様の喜寿慶祝梅松祭が聖地で行われ、「生きがいの探求」(昭和41年刊)につぐ第2弾として「生きがいの創造」が刊行された年である。碑には「神ながら霊幸はえませ大本の不動の信に吾れ奮い起つ」とある。このお歌は第2次大本事件で臣憲の苛酷な拷問を身に刻まれた尊師様が、昭和26年竹田別院で詠まれたもの。碑石は2m、幅1m、厚さ30cm、重量約2千貫の御影石で、昭和49年5月19日に建碑式が行われました。以後春秋の本苑大祭・月次祭・朝拝時には斉唱を続けている。

「三河本苑歌碑について」講話より①

皆様こんにちは、桜の花も散り、若葉に変わりました。今日この頃、本日は4月の三河本苑月次祭に、皆様共々参拝出来たことを、心から感謝し、又暑く御礼申し上げます。さて、本日は、諸先輩の皆様には、ご存知の事であり、若輩の私にとつて、おこがましい事ではございますが、新しくご入信された方や、ご存知ない方の為に、全国で一番に建立された日出磨先生の歌碑の由来について、少しくお話をさせて頂くべくお時間を頂戴いたします。



昭和42年3月頃、稲沢にありました東海本苑から別れて三河主会が発足いたしました。世帯数は220、信徒数900人でした。当時、三河主会では地方道場を開催していました。そして昭和47年5月、全国で第10番目の本苑として、一色町の医学博士・高須令三先生を本苑長に迎

え、大本三河本苑が発足致しました。翌年三河本苑では、神殿と教主館(万松館)が新築完成しました。48年の3月29日奈良の岡の家別院で三代教主さまより教主館を「万松館(ばんしようかた)」とご命名を頂きましたが、この完成記念に何か有意義なものを残したいと、

信徒全員がかねがね希望していたところ、日出磨先生77歳喜寿の慶祝に着目して、記念として先生の歌碑の建立をさせて頂いたらという事に成りました。しかも先生の歌碑は全国に一つも無い、出来れば第一号であります。是非御奉仕させて頂こうという事に成りました。これは、本苑信徒全員の念願でありました。そこで昭和49年1月歌碑建立の趣意書を添えて、建立願いを大本本部に提出しました。幸い本苑の希望は叶えられ、4月7日の春のひろく大祭のよき日に正式に歌碑建立の許可が本部より下りました。

さて日出磨先生のお歌であります。これは昭和26年2月、竹田から亀岡の照明館にお移りになって間もなくお詠みになったもので、「神ながら霊幸倍ませおおもとの不動の信に吾るい起つ」でした。

このお歌を是非お許し頂けたらということになり、三代教主さまにお願い申しあげたところ、快くお許しを頂きました。歌碑建立の許可を頂いた前日4月6日は、三代教主さまの誕生祭及び日出磨先生喜寿の誕生祭が亀岡で大慶祝の祭典(梅松祭)として執行されました。さかのぼりまして、昭和10年12月8日第2次大本事件がおこりました。日出磨先生への拷問がこの頃から始まり、先生のお苦しみは大変なものであったと伺っております。そして時が過ぎ、未決からお出ましになった先生は、兵庫県の竹田にお住まいになられたのです。竹田において、昭和26年1月19日午前10時くらい、日出磨先生は急に咳き込み、一時間以上も連続的に咳が襲い、顔が真っ赤になり、非常に苦しまれたそうです。

次回につづく

三河本苑だより

2月号
2023・2 No.489
(発行者) 大本三河本苑
〒443-0031 蒲郡市竹島町28-5
TEL.0533-69-7518
FAX0533-69-1455

お知らせ
祭式3級4級認定講習会
【日時】2月25日(土)・26日(日)
【場所】大本三河本苑
【申し込み】2月月次祭まで事務局に
※プログラムは、本苑事務所にあります。
祭務部

本苑・直心会・みどり会 合同研修会
【日時】令和5年3月19日(日) 月次祭終了後 午後1時
【講話】本部講師 「初心者のための土づくり」
今年度の本苑スローガン『食・農・環境』活動で良いお土の型を出す』の実践の一步

- 2月の行事
- 19日(日) 本苑2月月次祭
- 25日(土)・26日(日) 祭式3・4級認定講習会
- 3月の行事
- 5日(日) 東海サミット(長野主会)
- 19日(日) 本苑3月月次祭 女性祭員
- 本苑・直心会・みどり会 合同研修会
- 26日(日) 分所・支部長研修協議会

三河本苑公式LINE

↑ コチラから 本苑だより更新中

尊師さまに学ぶ

「人の使命」

特任宣伝使 芝田豊海

「日出磨先生之旧稿(上巻)」より
昭和二年八月

現界は平面的であり霊界は立体的である。故に現界では天国的の人と地獄的の人が、一堂に会して相語ることが許されている。(霊界では決してそんなことはない。)

これ全く肉体なる物質の殻を有するお陰である。何となれば物質は元来平面的であるからである。即ち元来、立体的なる靈魂を物質なる肉の宮に宿らしめて強いて平面的ならしめ、相互に訓練と陶冶(とうや)とをなさしめているわけである。

この意味からして、現界は質のみに墮した結果、霊界の

一面、靈魂の焼直し場であり修羅場である。で又、それだけ精神的には束縛されており苦悩の多い所などである。元来が物質的の世界であるだけ、靈魂上には無理の多いわけである。

しかし、人間なるものは元来半霊半物的に造られていて、一面霊界にも通じ、また一面、自然界に仕(つかまつ)って神の代理として現界を処理し得るべき能力があるのである。

それが現代ではしだいに物質のみに墮した結果、霊界の

光より遠ざかり真に行くべき途を失い、漸次困苦(ざんじこんく)の淵に沈まんとしている状態なのである。

故にもし人間が真に、その使命を自覚し神界との関係が判つて来て惟神の大道にさえ立ち返ったなら、元来半霊半物的に造られているのだから、さしたる精神的苦悩もなくして日を送ることが出来る筈なのであり、また出来ねばならぬのである。

現代の如く精神上の悩みの多いのは、これ全く物質にのみ墮して主たる靈的職能を放棄しているが為である。この事は個人的にも心と肉体との関係をよく考えてみれば分かる。

肉体の保持營養の為に心にもない業(わざ)にいそしんでいることの如何(いか)に苦痛であるかは、誰でも知っていることである。

人間が真に大胆に第一義的生活さえ皈(かえ)る事ができたなら、それで実は何もいう事はないのである。

霊界よりの内流即ち絶えざる心の最奥より閃きをよく受取り、これに従つて道を進みさえしたならば、例え外見は如何にあろうとも、その人にとつてはそれが真なのであり、従つて愉快と興味とに常にひたる事ができるのである。

これが生活の秘義(ひぎ)なのである。

連載 大本之ぼれ話

「おほもと(特集)」 出口日出磨先生読本より
昭和三十二年十二月

霊異寸滴

日出磨先生のご日常は、霊眼靈耳にはじまる六大神通力を縦横に活動されておこる神異に溢れているが、これはその寸滴を記録したものである。

特任宣伝使 芝田豊海

空中に文字

―指書き文字で空中通信の話―

日出磨先生が、高見元男氏の頃、京都の大谷敬祐氏宅にご滞在中のことである。

先生はよく大谷氏に

『ワシに急用がある時には、『高見元男直ぐ帰れ』と空中に文字を書いてくれ。ワシは何時、何処におつてもな、直ぐ急いで帰つてくるからな』と云いおいて出かけられた。

そこで大谷氏は「ひとつ実験して、信否をたしかめて見よう」と考えた。ある日のこと、先生の外出中に空中に指頭で、「高見元男先生、急用あり、ご帰宅下さい」と大書きしてみた。すると間もなく、先生はいかにもお急ぎの様子でお帰りになり、『何か？、ワシはあるところで、靈魂を調べていたら空中から大きな声で、早く帰ってくれという声が聞こえたので、急いで帰つて来たのだが、用事ってなんだい？』と聞かれた。大谷氏は「まさかーと思ったという。その大谷氏は今も大津市に健在の実業家です。」

西尾分所 高須 淨子

私の思い 脳が喜ぶこと

「脳ミソがめっちゃ喜んでる〜。」少々ふざけた表現ですが、あの心地良さを表すにはピッタリです。

14年前、要介護の両親がほぼ同じ時期に別々の施設にお世話になることになりました。その時の私の精神状態を心配した家族から「何か自分が楽しめることを探したほうがいい」と強く勧められて始めたのが太極拳。体を動かせることで、「道具が要らない、1人でできて相手が要らない&いつ休んでも、いつ辞めても誰にも迷惑をかけない」そんな消去法で選んだ市民講座でした。

週1回の講座に行ったり行かなかつたりで、練習では周囲の方たちの動きを追いかけ、形を真似るのにモタモタ。人一倍時間がかかりましたが、太極拳の練功とは自分と自分の体との対話だと気付いたとき、冒頭の心地良さがやってきました。後になって、これがランナーズハイなどウワサに聞く脳内麻薬というものかもしれないと思いました。ですが、自分が望んだときに望んだようにやってきてはくれません。うまくやろうとか褒められたいとか欲を出しても、考えすぎても脳は喜んでくれません。煩惱あるあるですね。

師に恵まれ、仲間に恵まれ、家族の理解に恵まれて、練習の回数が増えました。気付きの連続で完成形はありません。「焦らない、慌てない、諦めない、他の人と比べない&楽しむ」に今、着地しています。太極拳は奥の深いスポーツです。これからもゆっくりと静かに続けて参ります。

「マイ祝詞」「マイ箸」「マイボトル」「マイタオル」持参でお願いします